

日本語の終助詞使用

——日英対照の観点より——

守 屋 三千代

はじめに

話し手は外界に存在するモノや出来したコトガラを認識して、その認識内容を聞き手などの他者に向けて伝達したり、関連知識を提供したり、外界の刺激に伴う感情を表出したり、あるいは行為の要求を行ったりする。このときに、日本語では認識したモノ・コトガラを客観的に整理し抽象度の高い文法規則に沿って言語化する、という方向性だけでなく、むしろ談話を構成している具体的な話し手自身や聞き手自身、および談話の行われている場に注意を振り向け、そうした具体性に即して言語化するという特徴が観察される。(守屋2004.9)

日本語においては、話し手と聞き手は談話の場を構成し、かつ社会的存在でもある個人と個人として把握され、それに即して言語化される。すなわち、話し手も聞き手も必ずしも抽象化、記号化された人称代名詞で表示されるのではなく、話し手の主観により様々な種類の呼称があてられる。同様に、話し手と聞き手の社会的な立場や、個人的な関係性に応じて、文体や敬語なども使い分けられる。これに対し英語や中国語では、抽象的な機能語である“I/you/he, she, it”や「我/你/他」などの人称代名詞の体系を持ち、どんな話し手であっても、それを用いることで丁寧さを欠くといった社会的な不都合を生じることがない。同様に、文体や敬語の体系も持たないが、これも談話を構成する話し手と聞き手が言語使用上の約束事として抽象化、記号化された言語世界で、言葉がやり取りされることの現われであり、この点も日本語とは対照的である。こうしてみると、目の前の聞き手のありようを意識した終助詞の使用は、日本語の話し手と聞き手のとらえ方を如実に表しているといえよう。

また日本語においては、主題つまり談話で取り上げられている対象の提示とその維持に関わる主題マーカ―や指示語、および談話の論理的流れを細かにナビゲートする接続語などの談話構成に関わる形式が比較的多いことが指摘されている

が、特に話し言葉においては、「ね」のような間投助詞の機能を併せ持つ終助詞や上昇性のイントネーション—いずれも文終止を必ずしも意味しない形式であるが—を文末に伴う特徴的な現象も見られる。こうしたことから、日本語においては談話が話し手と聞き手の共同作業として意識されている可能性が窺える。

以上のような観点に基づき、小稿では終助詞に注目し、Ⅰで終助詞の記述に関する疑問点をまとめ、Ⅱで小説の会話文とその英訳とを対照しながら、日本語の終助詞使用の特徴を考える。

Ⅰ. 終助詞の記述に関する疑問点

周知のように、日本語の終助詞は情報の帰属先や情報量の優位性をめぐる話し手と聞き手の関係性や、親しさの度合い、共感の有無、聞き手の社会的立場、発話行為の種類などにより、どの終助詞を使うかがある程度決まってくると考えられている。例えば、指示の発話行為や、聞き手が未だ認識していないコトガラの提示には「よ」が、情報共有が想定できる場合の確認や同意要求、および同意を返答する場合には「ね」が付けられるなどである。

これらの情報は、日本語教育において終助詞を持たない多くの言語を母語とする学習者にとり、どんなときに使ってよいか、どんなときに使うと誤用になったり不自然になったりするか、そのめやすを示す点で、有効な基本的情報である。

しかしながら、このような情報の角度から終助詞を把握する考え方が終助詞の本質をついたものであるかという点、疑問がある。

第1に、例えば「ね」は、「先週もこの電車で会ったね」「そうだったかね。よく覚えてないね」などのように、情報の共有が志向されているとは考えられない場合にも使われており、情報の共有性の角度では必ずしも説明がつかないことがわかる。むしろ、情報が共有できるかどうかとは無関係に、談話や聞き手との関係性を構築し維持する機能を「ね」が担っていると考えの方が自然である。

第2に、聞き手が既に持っている情報や感情などに関する共有認識であるが、「聞き手の情報は本来未確認であり、確認不可能である」という現実と基本的な矛盾がある。我々は聞き手にいちいち同意を確認してから「ね」を使うわけでも、そうでないから「よ」を使うわけでもない。確かに、話し手が主観的に聞き手の情報を想定すると考えることは可能であるが、厳格に正確さを期して想定されるわけではないと思われる。

ここで注目すべき点は、聞き手しか知り得ない心的状況への言及は、疑問文と並んで「おいしいね／さびしいね」のように、「ね」を用いることで文法的に適

格になるということである。つまり、この場合の「ね」は、認識の共有という配慮的な目的のもとで、聞き手の内面に直接踏み込むことなく、かつ聞き手の内面への言及を可能にする、必須の文法形式として使われている。

第3に、通常の会話では共有する情報が多く、情報のありかを特定する必要のない普遍的知識にむしろ基づいて交わされており、その際も複数の終助詞が使われる。この点から見ても情報のありかという観点からでは、説明がつきにくい。

第4に、終助詞の「よ」が聞き手の未知情報を提示する際に用いられる終助詞だとすると、以下のようにまさに情報提示の場合でも聞き手への配慮を欠き、不適切な文になることの説明がつきにくい。

例) : (提出の際に)「先生、これはレポートですよ」

聞き手にとり新しい情報を提供することが言語伝達の基本であるのに不適切となることは「よ」が聞き手の未知情報を提示する以上の機能をもつことを示唆している。

第5に、終助詞は必須成分として用いられる場合がある一方で、無意識に欠落したり、付けられたりしている場合や、ごく軽い意味で用いられる場合も少なくない。こうした幅があることはむしろ終助詞の性質を把握する上で大切な点である。同時に、終助詞を使わないときっぱりとしすぎた表現だと感じられることもあるが、これは終助詞付きが有標、終助詞無しが無標という対立ではなく、使うかどうか、使うならどれを使うかが、同列の選択肢となっていることを示唆している。このことも、情報のありかという角度から終助詞をとらえることの難しさを示している。

第6に、談話レベルでも終助詞は使い分けられ、文と文をつなぐ機能が観察されることがあげられる。例えば、「おいしい、おいしいな、おいしいね／おいしいよね」は、この順番で連続的に発話されることはあっても、この逆は成り立ちにくいと考えられる。また「おいしいよ」と言って前提を作り、その上で行為を促しておいて、「ね、おいしいよね」と確認を求める場合も同様である。これは終助詞が話し手個人の認識のレベルから聞き手に認識が向かうレベルへの段階に応じた体系を持っていることを示唆している。

第7に、終助詞の「よね」「わよ」「わね」等、互いに機能が対照的な終助詞同士の重ね型があげられる。例えば、A「あら、素敵だわ、これ」B「うん、いいわね」A「色もいいわよね」B「うん、似合うわよ」などと言う表現が可能であるが、これらは話し手自身の認識あるいは表出、聞き手を意識した認識、聞き手に何らかの行為を促すような働きかけを持った認識を、一つ一つ言語化した結果

である。これらの異なる終助詞を共存させることで、聞き手への語りかけが話し手個人の感情も含めた確かな認識であること、さらに聞き手と共有できるものであることが二重、三重に表現される。つまり、認識、感情双方の共有の表現であり、情報内容とは別に、決して抽象化されることのない聞き手との濃密な関係性の構築を感じさせるものである。

第8に、終助詞は聞き手に応じて、使用を控えたり、逆に多用されたり、あるいはある終助詞が他の終助詞に変更されたりする。例えば目上の聞き手には「よ」や間投詞、終助詞を問わず「ね」を繰り返すことは避けられるものと思われる。この点でも、終助詞使用は話し手と聞き手との関係性の表現に関わることがわかる。

第9に、どの終助詞を使うかには男女差もある。これも同様に終助詞が話し手が聞き手にどんな立場で言葉を伝えるかを表現する機能を持つことを示している。

第10に、「ね」も「よ」も話し手が内言のように言葉を引き取る場合でなければ、上昇性イントネーションで発せられ、これは文末でも文中でも変わらない。つまり、終助詞であれ間投助詞であれ、聞き手に発話を投げかけ相手の返事なり同意なり、気づきなりを求めている点は同様であり、そのうち終助詞として使われているのはたまたま文として終止したと把握されたためにすぎない。例えば、「この件はまた審議することにしましょうか」「そうですね、そうしましょう。」という場合の「ね」は、読点で書かれているため一般に間投助詞と把握されるが、実際の発話では文終止したかどうかの決め手はない。このことは「ね」には談話と聞き手との関係性をいかに構築、維持するかとともに、間投助詞、終助詞の機能の別なく、談話の維持に関わる機能もあることを示している。

このように見てくると、終助詞は文の最後部、聞き手に対峙する最前線の場所にあって、命題の伝える情報伝達や発話行為とは別に、聞き手との関係性に対する心的態度を伝えるものであり、その底流には話し手による聞き手との共同認識(守屋2005. 10)志向があり、さらにそれが談話の構築、維持にも関わっていると考えられる。

こうしたスタンスに基づき、以下、川端康成『雪国』の会話部分とE. G. Seidensticker 訳“Snow Country”とを対照する。終助詞の体系を持たない英語では基本的に対応する形での翻訳は不可能である。翻訳できないことにより、もれ落ちるものは何か、あるいは終助詞を使うことにより何が実現するのか、終助詞の表現をそれを持たない英語で伝えようとした場合、どのような工夫がなされ

るか、なぜ日本語の話し言葉においてこれほどの頻度で終助詞が使われるのか、さらに談話構成において終助詞はどのように関わっているかを考察したい。

II. 終助詞の用法の実際：英訳との対照

以下川端康成『雪国』と Snow Country (E. G. Seidensticker 1957C. E. Tuttle) を例に分析する。(注1)

II-1. 文における終助詞の使い分け

1. 終助詞なし：聞き手認識を積極的に表現せず、宣言的に表出する。

「いけない、いけない。帰る、帰る。」「歩けるもんか。大雨だよ。」

「はだしで帰る。這って帰る。」

“It won't do, It won't do. I'm going home. Going home.”

“Do you think you can walk that far? And listen to the rain.”

“I'll go home barefoot. I'll crawl home.”

上の例のような意志動詞の場合、終助詞がないと聞き手の意向の有無とは没交渉的な強い宣言的な文となる。この点でも日本語においては、終助詞なしの文が無標の文だと言えないことがわかる。

これに対し、英文は基本的にこのような終助詞無しの文である。この違いは大きなものであるが、だからといって英語が聞き手との関係性は無頓着で、そのため聞き手認識を言語化しないことを意味するわけではない。例えば、英語では話し手をI、聞き手をyouで指し、それは基本的に社会的な現実の関係性によって変更されることがないが、それはあくまで客観的・抽象的な言語記号としての約束事としてこれらの人称代名詞が使われているためであって、もちろん話し手と聞き手の存在そのものまでを記号化しているわけではない。これに対し、日本語は「あなた」という代名詞を使うことにも制約があるが、これは話し手も聞き手も言語化する際に抽象化する過程をもたず、生身の人間として現実的な社会的・感情的関係性に即して言語化する傾向の現われだと考えられる。終助詞の使用もこうした眼前の聞き手の認識の仕方に基づいていると考えられる。

なお、上の英訳は日本語同様、繰り返し同じ言葉が発せられ、また “I'll go home barefoot. I'll crawl home.” などと言う言い方そのものにより、酔って話している感じになっているが、英語として当たり前の無標の文であって、特に宣言的な言い方にはなっていない。

2. 終助詞なし：未分化な表出 c f. 「わ」：聞き手認識含む表出 「よ」：聞き手への訴えかけ

突然擦半鐘が鳴り出した。二人は振り向くなり、「火事、火事よ！」「火事だ。」火の手が下の村の真中にあがっていた。～「どこだ、君が元いたお師匠さんの家、近いんじゃないか。」「ちがう。」「どのへんだ。」「もっと上よ。停車場寄りよ。」～「あら、繭倉だわ。繭倉だわ。あら、あら、繭倉が焼けてるのよ。」

“Fire, fire!” “A fire!” “Where is it? Fairly near the music teacher's?” “No.” “Where then?” “Farther up toward the station.” ~ “It's the cocoon-warehouse. The warehouse. Look, look! The cocoon-warehouse is on fire.”

上の例からは、終助詞なしの未分化な表出から、終助詞を伴う聞き手を意識した表出から、聞き手への訴えかけという段階があることが窺える。すなわち、「火事」→「火事よ」、「繭倉だわ」→「繭倉よ」、という流れはいずれも逆にすることは不可能とはいえないが、やはりこの順序の方が自然である。前者は眼前の発見で未分化な状態から聞き手を認識し注意を促す機能へ、後者は聞き手を意識しつつも驚きとともに表出しているレベルから聞き手に注意を促すレベルへと変化しており、この流れは認識の段階にほぼ一致するように思われる。終助詞には様々な形式があるが、これらは話し手のこうした未分化な表出から聞き手を意識し、さらに聞き手に何らかの行為を促すに至るまでの認識の軸に沿って、過不足なく表現し分ける体系を持っていると思われる。(守屋2005.10)

この点に関し、英訳では fire から a fire へ、認識の度合いあるいは概念化の度合いに応じて無冠詞から不定冠詞へと、やはり未分化な認識レベルから存在が認識された認識レベルに応じた使い分けが見られる。なお、聞き手に認識の共有、あるいは共同注意を求める「繭倉よ、繭倉よ」は、Look, look! と訳出されているが、このことは「よ」が共同注意を促す典型的な形式であることを窺わせる。

3. 「わ」：聞き手の存在・状況を認識しつつ、話し手の考え・心のありようを表出する

・ (弟がこの駅に勤めることになったことに対して) 「お世話さまですわ。」

“Thank you for all you've done.”

・ (駅長が怪我をして、医者に通っていると聞いて) 「まあ、いけませんわ。」

“You must be more careful.”

「わ」は表出を表すと言われているが、内言的ではなく、あくまで聞き手を意識した上での表出である。かといって、「ね」ほどには聞き手に直接訴えかけて

共に認識を確かめ合う感じにまではならない。つまり「わ」は内言的な表出と聞き手への訴えとのあわいにあって、聞こえよがしの訴えかけのような語りかけ方を表現する。

上の英訳文では、前者は聞き手へのねぎらいの表出などよりも強い具体的な謝意の表明をしており、後者は聞き手の不注意を指摘する表現に近づき、むしろ「わ」のない文の英訳に近くなっていると思われる。前者は例えば I feel like to appreciate your kindness～とすればより原文の聞き手への訴えかけ方に近づくとと思われる。問題は後者で、同様に I feel sorry to hear that …,あるいは That's too bad.などとする方が、一見原文により近づくように感じられるが、実際はこのような話し手の表出的な表現では聞き手に対する見舞いの言葉にはならず、I hope it's nothing serious.などとする必要がある。つまり、日本語の述定文による表出は聞き手を強く意識した表現であるため、聞き手に向けた発話行為にもなりうるが、英語ではそれでは単なる個人的感想の述べ立てに過ぎず、そのため I hope などの形式が必要になると考えられる。

4. 「わ」：聞き手の存在・状況を認識しつつ感情を表出する

5. 「よ」：聞き手に直接訴えかける

「港へ帰ったんなら、そうと手紙をよこせばいいじゃないか。」「いやよ。そんなみじめな、いやよ。奥さんに見られてもいいような手紙なんか書かないわ。みじめだわ。気兼ねして嘘つくことないわ。」

“But if you were down on the coast you could have written me a letter.”

“I couldn't. I really couldn't. I couldn't possibly write the sort of letter your wife would see. I couldn't bring myself to. I don't tell lies just because people might be listening.”

この例では、「よ」は正面から聞き手の目を見て訴えかける感じ、「わ」はそっぽを向いて、しかし十分聞こえよがしに訴えるような感じが表現されている。ただし、この談話は全体で反論しており、個々の文は、いずれも話し手の個人的な感情であり、聞き手の行為に直接関わるものではない。従って、ここに現れた終助詞は個々の発話をどのように繰り返すか、その時々のアトランダムな感情の表れであり、現れては消える息づかいのようなものである。そのため、「いやだわ。そんなみじめな、いやだわ。～手紙なんか書かないわよ。みじめよ。気兼ねして嘘つくことないわよ。」というように仮に終助詞を逆にしても、「よ」を「わよ」と女性形にすれば、個々の文も口吻の出方に違いは生じるが、談話レベルの表現

意図に大きな変化を生じることはない。

英訳では、不可能を強調するのに、命題内部に操作が加えられている。すなわち、really や possibly などの副詞や理由として不十分であることを強調する just because などの表現、さらに、I couldn't bring myself to. などの自己への強制の不可能を表す表現などを使って、「よ」や「わ」のいわば訴える語気の強さが表現されている。日本語の終助詞は聞き手との最前線であるため、こうしたシチュエーションでは直接感情をおつけ、しかも聞き手の反応を意識した表現となる感じとなり、聞き手との関係性がすぐにでも揺らぎそうな印象がある。これに対し、英訳ではあくまで命題内部で、いかに不可能だったかという一事を主張する印象のみを与え、原文のように感情のままに言葉を繰り出すといった印象は特には与えないものと思われる。

6. 「よ」：聞き手よりも詳しく得ている情報・知識であると認識し、それを提示する

・ (島村に芸者を世話してくれと頼まれて断ると)「嘘をつけ。」「ほんとうよ。」
“Don't be silly.” “It's the truth.”

「よ」は話し手所属の情報であり、「ね」は聞き手所属であることは確かにこの「よ」を「ね」に替えてみるとよくわかる。なお、英訳はこの「よ」のような聞き手への語気の強さというものは表現していないようであり、仮に表現するとしたら、5のように副詞句を用いて事実であることが強調されると考えられる。

7. 「よ」：聞き手の内的状況でも、より正当な判断基準を得ていると認識し、一方的に指摘する

・ (昼間から芸者を呼べと言われて渋る駒子に)「屑が残るといやだよ。」「あんたそんなことを言うの、この土地を荒稼ぎの温泉場と考えちがいでらっしゃるのよ。～」

“At night there's too much danger of getting the dregs no one else want.” “You take this for a cheap hot-spring town like any other.”

ここでは、聞き手の推論内容までを「よ」で話し手の確かな情報として提示している。「ね」のように情報の本来のありかが聞き手に所属していることに斟酌しない点で、同じ決め付けでも強引な印象を与えやすい。英訳でも聞き手を主語においた You take～と聞き手のなわばりを侵犯する強引な言い方になっており、この点で原文に近い表現が選ばれていると思われる。

8. 「よ」：判断の提示・指摘

9. 「ね」：感想・直感の聞き手への投げかけ

「君はいい女だね。」「どういいの。」「いい女だよ。」「おかしなひと。」

“You're a good woman.” “How am I good?” “A good woman.” “What an odd person.”

上の発話は、最初の終助詞を「よ」にすることは可能であるが、後の方を「ね」とするのは不自然である。このことは、聞き手と共通認識を志向する段階と共同注意を促す段階のうち、前者の方がより表出的であることを感じさせる。

英訳においても、“You're a good woman.”と“A good woman.”の順番は変更できないと考えられるが、その理由は日本語の場合とは全く異なる。前の文は表出的でも共通認識的でもなく、あくまで話し手個人の認識の説明である。ここを後者の一語文をもってくると、呼びかけのようになり、この談話においては文意を成さない。

10. 「ね」：事実認識に基づき、聞き手がそれと認めていると十分認識でき、それに基づき指摘する

・「あんた、やっぱり髭をお申しにならなかったのね。」

“You didn't grow a mustache after all.”

ここは、見れば一目瞭然、聞き手自身のことなので聞き手が異を唱える可能性はないところで「ね」が使われている。なお、期待に反している感じは「やっぱり」や認識の焦点を指摘する「の」が担っていると考えられる。

英訳では、期待に反する落胆は、after all に支えられて表現されている。この場合は聞き手の情報そのものであるため、認識共有を図る付加疑問文は使えないが、日本語では聞き手の状況そのものも共同認識の対象であるため、「ね」でマークできることがわかる。

11. 「ね」：聞き手も話し手のように認めると認識でき、それと指摘する

・「星の光が東京とまるでちがうね。いかにも宙に浮いてるね。」「月夜だからそうでもないわ。」

“The stars here are different from the stars in Tokyo.” Shimamura said after a time. “They seem to float up from the sky.” “Not tonight, though. The moon is too bright.”

駒子は東京にいたことがあるので、島村が「ね」と訴えかけるのは十分根拠が

ある。実際はそうはいかず「そうでもないわ」と反論されている。このパターンは案外多く、「ね」がいかにか話し手の主観で使われているにすぎないかがわかる。英訳では、島村の言葉は聞き手に同意を求める表現はとっていない。原文ではここは駒子が当然共感を示すと想定した発話になっていてよい箇所であり、それでこそあとの駒子の反論が生きてくるのであるが、英語の場合このような描写的、表現性の高い文では聞き手の同意を求める付加疑問文は使いにくいのかもしれない。なお、最後の駒子の言葉は文末に *though* をつけて、命題部分への抑えた反論を表現している。いわば命題内部の処理であり、その意味で論理的な必要性に基づくものであるので、原文の「そうでもないわ」のような、聞こえよがしに反論する口吻が伝わる余地はない。

12. 「ね」：事実・情報なしに、聞き手の内的状況を主観的に認識し、それと指摘する

「旦那さん、ずいぶん結構なお身分で、柔らかいお体でございますね。」～「～ちょうどよい工合に太ってっいらっしゃいますが、お酒は召し上りませんね。」
「よく分るな。」～「なんでございますね、お酒を召し上らないと、ほんとうに面白いということがございませぬね、なにもかも忘れてしまう。」「君の旦那さんは飲むんだね。」「飲んで困ります。」

“You must not have to work. Feel how nice and soft you are.” ~ “~But you're just right, not too fat and not too thin. And you don't drink, do you?”

“You can tell that?” ~ “But when you don't drink, you don't know what it is really to enjoy yourself—to forget everything that happens.” “Your husband drinks, does he?” “Much too much.”

日本語では聞き手のことに言及する場合よく「ね」が用いられ、「コメントの『ね』」の名称で呼ばれ他とは別に分類される。これは聞き手の同意が得られるためというよりも、聞き手に所属することだからだと考えられている。しかし、この「コメントの『ね』」は仮に「ね」が他の用法と同様、聞き手との共感や同意を最終的に求めて発せられるものとしたら、不自然なことになる。ここで「ね」を単に共同認識を志向するだけの機能を持ったものと考えれば、仮に話し手と聞き手がともに晴天を目にしていれば「いい天気ですね」と言って共同で認識し、それで挨拶に代えることができるのと同様に、聞き手のなんらかの美点を「素敵ですね」と言って聞き手と共同で認識し、結果的に褒めなどの社交辞令のような発話になるのだと考えられる。

英文では感嘆や一般論の提出の場合そのまま断定が、ある程度確信を持った推論でかつ聞き手の同意を求める場合については、付加疑問文（2箇所）が用いられ、使い分けが見られる。この付加疑問の用い方の限りでは、確かに日本語の「ね」の表現と似た用法となっていると言える。

13. 「ね」：聞き手への一方的な決め付けVS「わ」：話し手自身の考え

感情を聞き手を意識した表出（駒子を読んだ小説を書き留めておき、その雑記帳がもう十冊になったと聞いて）「感想を書いておくんだね。」「感想なんて書けませんわ。～「そんなものを書き止めといたって、しょうがないじゃないか。」「しょうがありませんわ。」「徒労だね。」「そうですわ。」（と、女はこともなげに明るく答えて、しかしじっと島村を見つめていた。）

“You write down your criticisms, do you?” “I could never do anything like that.” ~ “But what good does it do?” “None at all.” “A waste of effort.” “A complete waste of effort” ,.

「ね」は今までに指摘したように、同意が期待できないことでもあえて使い、共同認識を促すことにより、談話の状況次第で、強引に主張を認めさせるような機能も果たす。英訳の付加疑問文については、先の場合と同様である。

ここで注目すべき点は、“A waste of effort.” “A complete waste of effort” という断定に対し、completeと聞き手の主張を認めつつ、それは既に自分自身が認識していると表現している点である。この点に限って言うと、むしろ「わ」の文より「よ」の文の場合の英訳に近いかもしれないが、いずれにせよこのように形容詞である種の語気の強さを表現し、終助詞の口吻に近づこうとする方法がとられていることは興味深い。

14. 「ね」：聞き手の意向・同意が得られると認識し、それに基づき誘いかけ、同意を求める

「一年に一度でいいからいらっしゃいね。私のここにいる間は、一年に一度、きつといらっしゃいね。」

“Once a year is enough. You'll come once a year, won't you, while I'm here?”

勧めや依頼は聞き手の真意がわからないからこそ行われる。そのため、共通認識を志向する「ね」は聞き手の同意を求めれば得られるはずだと期待をかけたか、逆に所詮は同意をしてくれないだろうが、はかない期待をかけてみようとかいっ

た、うらはらな感情をないませにして表現する。英訳でもこのようないませとなった期待感と不安感が *You'll~, won't you.* という強引でかつ相手の真意は相手次第という構文で表現されていると考えられる。

II-2. 談話レベルで見られる終助詞の多用

15. 「よ」：話題に関する情報提示において、話し手が聞き手より優位にあることを示し、談話の流れをコントロールする。

「これからだね」「これからですよ。この雪はこの間一尺ばかり 降ったのが、だいぶ解けて来たところです。」「解けることもあるのかね。」「もういつ大雪になるか分かりません。」

“The heavy snows come from now on?” “They're just beginning. We had about a foot, but it's melted down a good bit.” “It's been melting, has it?” “We could have a heavy snow almost any time now, though.”

原文では「この土地の寒さや雪に関する情報の優位性は宿の番頭がもっており、そのため文体は丁寧であるが、「これからですよ」のように「よ」を伴う形式をとって、この談話の主導権を握っていることが示されている。そのため「雪が解けることもあるのか」という質問への対応もそこそこに、「いつ大雪になるかわからないほど、寒さが迫っている」とあくまで自説を続けて述べている。

英語では、そのように番頭に談話の主導権があることが訳出できない。その代わり、相手の問いかけに答えずに自分の意見を述べることにより生じたある種の談話のねじれに対し、ここでは *though* をつけることで解消していることに注目される。すなわち、前の *We had about a foot, but it's melted down a good bit. It's been melting, has it?* という発話と、*We could have a heavy snow almost any time now.* という発話を命題内部の意味の面で接続し、原文とは別の方法で結束性を持たせている。

16. 「ね」：共有知識化することにより、談話における前提化をする

「弟が今度こちらに勤めさせていただいておりますのですってね。お世話さまですわ。」

“I understand my brother has come to work here. Thank you for all you've done.”

この場合の「ね」も聞き手の反応を待つかのように上昇性イントネーションが使われる。先にも述べたように、この意味で「ね」の文それ自体は、厳密な意味

では完結していないと考えられる。このことは、終助詞の文が聞き手と共同で談話が構築されていることを示唆していると考えられる。ここでは、「ね」のあとに「駅長がおそらくうなづく、あるいは肯定する反応が想定されており、それを前提として、事実に対するコメントが「わ」でなされるという構成になっていると考えられる。

英訳の I understand は、駅長はこの事実を当然よく知っているが駅長本人から聞いたわけではないことから付けられたと考えられる。この点は「ね」で表現される文とこの英訳で表現される事実関係とは同様である。ただし、「ね」の場合は聞き手からの情報であっても共同認識が可能であることに変わりはないので、「ね」をつけることに問題はない。この点で、聞き手からの情報であることに関しては「ね」の使用と比べた範囲では、英語の方がむしろ制約が大きい。

17. 「よ」:情報提示⇒前提化⇒「ね」前提・共通認識の設定⇒「よ」:情報提示
(⇒因果関係の構成へ)

「ほんの子供ですから、駅長さんからよく教えてやっていただいて、よろしく
お願いいたしますわ。」「よろしい。元気で働いてるよ。これからいそがしくな
る。去年は大雪だったよ。よく雪崩れてね、汽車が立往生するんで、村も焚
出しがいそがしかったよ。」

“He's really no more than a child. You'll teach him what he needs to know, won't you.” “Oh, but he's doing very well. We'll be busier from now on, with the snow and all. Last year we had so much that the trains were always being stopped by avalanches, and the whole town was kept busy cooking for them.”

ここでは、まず「よ」で聞き手の新事実が提示され、そこから容易に推論される因果関係を「ね」で示し共通認識の前提とし、それによってさらに次に文をつなぎ、次には「(ん)で」で明らかな因果関係を構成し、最後に新事実である結果を「よ」で表現する、という構成となっている。つまり、聞き手の認識を時間軸に沿って徐々に積み重ねていく述べ方となっている。

これに対し、英語では文の因果関係を表す形 so～that 構文、受動文、and と受動文などで命題内部で論理的に整理され、提示されていることがわかる。この点、日本語では終助詞を繰り出しながら、聞き手の理解と同時進行で、談話を構成しているのかもしれない。

Ⅲ. 終わりに

以上より、日本語における終助詞の使用自体が大変ユニークな特徴であると思われる。また、話し手が認識し表出する終助詞を伴わない段階から、それを聞き手との共同認識を目指して、聞き手を意識した表出（「わ」）から聞き手との共同認識を志向した表現（「ね」）、あるいは聞き手に認識を促す（「よ」）の段階と細かに使い分けられている点も注目できる。終助詞は文末に位置するとはいえ、上昇性のイントネーションで発せられることからわかるように、文を終える機能よりもむしろ聞き手と共に認識しながら、文を超えて談話とその意味を構成する機能を持っているようである。

このような終助詞の機能は、日本語の言語化の際の具体的な把握の仕方、聞き手への注目度の高さ、認識、談話構成を聞き手との共同作業としてしようとする志向性などに支えられていると考えられる。また、談話という短期記憶において言語活動が行われる中で、終助詞の数が数個に限られており、音節数も少なく、用法の際に命題部分などから厳格な条件がなく、無意識に使われるだけのフットワークの軽さがあるという性質も、この機能を十全に発揮できる大きな理由となっていると考えられる。（守屋2005.10）今後もさらに考察を進めたい。

注1. 小稿は守屋2005.9を大幅に加筆、修正したものである。

参考文献

- 2004.9 守屋三千代「イマ・ココの日本語：日本語の認知スタイルと配慮表現—日本語教育の立場から—」『日本認知言語学会全国大会論集』
- 2005.9 守屋三千代「日本語における聞き手認識の言語化—『雪国』を例に見た日本語の認知言語学的特徴—」日本認知言語学会ワークショップ発表要旨
- 2005.10 近藤安月子・守屋三千代「認知言語学と日本語教育：認知的視点を取り入れた日本語文法教育への提案—聞き手認識と文末表現を中心に—」北京日本学研究中心20周年記念シンポジウム発表要旨